様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７００５８

研究課題名（和文）「動き」と「明るさ」の美学――小津安二郎初期映画と戦間期日本における映画言説

研究課題名（英文）The Aesthetics of Mobility and Lightness: Early Films of Ozu Yasujiro and the Discourse on Cinema in Interwar Japan

研究代表者
瀧浪　佑紀（滝浪佑紀）（Yuki, Takinami）

東京大学・大学院情報学環・特任准教授

研究者番号：３０６３１９５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「『動き』と『明るさ』の美学――小津安二郎初期映画と戦間期日本における映画言説」では、初期作品における小津安二郎の映画美学の発展をハリウッド映画の影響という観点から考察する（一年目）とともに、彼の映画実践の含意を同時代の映画美学の中に位置付ける（二年目）ことを目的とした。一年目には、小津の特異な切り返しの発展の過程を辿った日本語論文の執筆、一九三〇年代中盤におけるトーキー化を意識した際の小津の映画実践に関する国際学会発表、二年目には、一九三〇年代中盤の小津作品の変化を同時代の映画言説を参照しながら考察した国内学会発表などを行い、さらには今後の外国語での研究発表・論文発表の土台を作った。

研究成果の概要（英文）：This project titled “The Aesthetics of Mobility and Lightness: Early Films of Ozu Yasujiro and the Discourse on Cinema in Interwar-period Japan” attempted to examine the development of Ozu Yasujiro’s film aesthetics in the early period in terms of the influence of Hollywood cinema (the first year) and to situate Ozu’s early practice within the contemporary discourse on film aesthetics (the second year). In the first year, I published a paper in which to trace the developmental process of Ozu’s idiosyncratic shot/ reverse shot and presented a paper about the transformation of Ozu’s films in the mid-1930s when he was conscious of making talkies in an international conference. In the second year, I presented a paper in which I related Ozu’s mid-1930s practices with the contemporary discourse on cinema (about talkies) in a conference in Japan and further prepared the ground in which I could publish and present papers in foreign languages.

研究分野：映画史・映画理論

キーワード：日本映画　サイレント映画　ハリウッド映画　前衛映画理論　戦間期日本文化

１．研究開始当初の背景

（１）小津安二郎は、日本を代表する映画作家として世界的にも大きな名声を勝ち得ている。とりわけ、小津作品は 1940 年代後半から 1960 年代初頭に製作された「巨匠の作品」を中心に、それらの作品が表現する「日本的価値」ならびに、小津安二郎の特異な映画スタイル（カメラの低い位置など）によってよく知られている。しかしながら、小津は 1920 年代後半以降、ハリウッド映画の強い影響の下、自らの映画作家としてのキャリアを始めたのであり、始めから「日本的価値」を表現する「特異な映画スタイル」を持った映画作家ではなかった。小津がいかにして自らの独特の映画作品を制作する巨匠になったのかについては、初期作品を中心に注意深く検証される必要がある。

（２）さらに小津が映画作家としてキャリアを始めた 1920 年代は、サイレント映画の後期にあたると同時にその黄金期であった。加えて、戦間期における近代化という歴史的潮流の中で、映画は同時代の社会ならびに文化を映し出すメディアであると考えられていた。こうした理由から、多くの知識人や芸術家たちは映画について批評を書き、また独自の理論を発展させ、実践に移した者も多かった。小津は撮影所内の映画作家として、理論的著作を書いたわけではない。しかし、彼の映画実践は、こうした前衛映画作家・知識人による言説と同じ地平で考えられる必要がある。

２．研究の目的

（１）先述のように、小津は日本を代表する映画作家として世界的な名声を得ているが、その初期作品の歩みについては十分な研究がなされていない。本研究は、このように十分な研究がなされてこなかった領域を、とりわけ小津自身が大きな影響を受けたハリウッド映画との比較において、綿密なテクスト分析（ショット毎分析）を行うことで、日本を代表する巨匠監督の十分に知られていなかった側面を明らかにすることを目的とした。

（２）加えて、1920 年代後半から 1930 年代にかけての日本における映画に関する言説についても、これまでに十分な研究がなされているとは言えない。数多くの映画に関する雑誌（月間以上の重要な批評誌が少なく数えても二冊以上発行されていた）や映画に関する著作、独自の映画論を展開させていった映画批評家・理論家の仕事を再評価することは極めて重要な研究であり、本研究は、小津安二郎との接点（多くの批評家が小津作品を論じていた）ならびに、外国映画理論（とりわけ前衛映画理論）の紹介および適用という観点から、この先行研究の少ない領域を検証することを目的とした。

（３）さらに本研究は、小津安二郎の作品研究ならびに同時代日本における理論的・批評的言説の分析を通じて、戦間期においてグローバルな規模で共有されていた映画美学への関心に光をあてることを目的とした。先述のように、当時の日本においてはハリウッド映画作品や欧州前衛映画理論など同時代において最先端の作品や言説がほとんど同時的に導入されていた。また、戦間期の前衛映画理論はその「近代化」、「戦争」、「ニューメディアとしての映画」という観点から、近年の映画研究においてきわめて大きな注目の的となっている。本研究は、日本における映画言説・実践の検証を通じて、こうしたグローバルな規模で共有されていた映画に関する思考を照射することを目的とした。

３．研究の方法

上述の「研究の目的」の欄に書いたように、本研究は、（１）小津初期作品の分析、（２）日本における映画言説の検証、（３）日本における言説・実践の検証を通じての、グローバルな規模において共有されていた映画論の考察の三つを目的としていた。これら三つの目的に沿って、本研究は考察を進めた。より詳述すれば、以下の通りとなる。

（１）小津安二郎の初期作品研究については、現存作品のすべてが DVD で利用可能であり、これを素材として、詳細なショット毎分析を行った。小津は彼の特異な「映画スタイル」（低いカメラ位置、視線の一致しない切り返し、事物のショットなど）によっても有名である。本研究は、とりわけ小津が影響を受けたハリウッド映画（エルンスト・ルビッチ、ジョセフ・フォン・スタンバーグ、ハロルド・ロイド、キング・ヴィダーなど）との関係を考察することによって、小津がこうした映画スタイルを発展させた過程を詳細に辿った。こうした検証を通じて、単なる主題論的影響（例えば、大学生や都市生活、モダンガールといったモチーフ）にとどまらない、映画美学の水準（〈動き〉と〈明るさ〉の美学）における、小津に対するハリウッド映画の影響を跡付けることを目指した。

（２）日本における映画言説の検証に関しては、『キネマ旬報』や『映画評論』、『映画往来』をはじめとする同時代の最重要映画ジャーナルに掲載された批評文、理論的言説、作品評を広範に調査・分析するとともに、とりわけ岩崎昶および岸松雄という二人の重要な批評家の著作や雑誌記事の読解を進めた。岩崎に関しては、彼の左翼映画批評家・実作者としての活動を跡付けるのみならず、ヨーロッパの前衛映画理論の受容（よりわけフランスやソヴィエト・ロシアのモンタージュ論）という観点から考察し、岸に関しては、彼自身による小津のインタビューおよび、他

の映画作家へのインタビュー、『キネマ旬報』に定期的に掲載された作品評、1930 年代中盤に彼独自に発展させたトーキー・リアリズム論に焦点を絞って、戦間期日本における映画論の検証を進めた。

（３）上記二点の日本における映画実践ならびに言説の分析に加え、グローバルな規模で共有されていた映画理論の再読も進めた。ベラ・バラージュ、ジャン・エプスタイン、ルネ・クレール、セルゲイ・エイゼンシュタイン、ジガ・ヴェルトフ、ジークフリード・クラカウアー、ヴァルター・ベンヤミンなどの著作を、英語訳および日本語訳に加え、原語によって読み込み、映画、社会、文化、近代、技術の相互関係を、戦間期というきわめて不安定かつ革命的（民主的）文脈において考えた。加えて、とりわけ 2000 年以降において、こうした戦間期の映画理論の再読の必要性は、映画学内部において重要な研究課題として大きな注目を浴びている。本研究では、こうした二次文献を積極的に参照し、戦間期に映画というメディアが持っていた含意の理解に努めた。本研究ではその延長上として、近年のデジタル革命によるメディアの布置再編の含意についても考えた（近年、戦間期映画理論が大きな注目を集めている理由の一つは、私たちのメディア環境が劇的に変化しつつある点が挙げられ、またデジタル技術を含めた近年の最新メディア研究の多くも戦間期の映画理論を積極的に参照している）。

４．研究成果

本研究は、上記三つの方法に沿って、研究成果をあげた。すでに論文や研究発表というかたちでまとめられ、発表されたものもあるが、現在論集への掲載の査読のプロセスにあるものや、翻訳の過程にある研究も存する。より具体的に詳述すれば、以下の通りとなる。

（１）小津の初期作品研究としては、論文というかたちで、小津の特異な映画スタイルのひとつである「視線の一致しない切り返し」の発展過程を辿った論考を発表した（「不連続性の感覚―小津安二郎の〈視線の一致しない切り返し〉の発生過程」）。加えて、小津の代表的なサイレント作品である『生れてはみたけれど』を分析した英語論文をまとめ、小津に関する英語アンソロジーへの掲載に向けて、現在、第一稿の査読（通過）、編者によるコメントを踏まえての改稿およびネイティブによる英語校正を経て、すでに第二稿をアンソロジー編者に提出済みである。加えて、トーキー化を意識し始めた時点での小津の映画実践（1934-1935 年あたり）の作品分析に関する研究発表も、国際学会ならびに屋内学会において、英語ならびに日本語で行っている（“The Issue of Sound Cinema Aesthetics in Early-1930s Japan: Theory and Practice”および「小津安二郎映画における〈演出〉の美学―1930 年代中盤の作品を中心に」）。

（２）戦間期日本における映画言説分析に関しては、現在査読中の英語論文は、戦間期の左翼映画批評および岩崎昶の仕事の文脈の中で、小津作品を考察したものである。同論文では、小津の小市民映画の新しい側面を、よりラディカルな左翼映画（プロレタリアート映画）という観点から照射できたものとなっている。加えて、国内学会研究発表において成果を提出できた研究では、岸松雄の映画論を参照しながら、小津のトーキー映画の実践（あるいはトーキー移行を準備するにあたっての小津映画美学の変化）を考察したものとなっており、サイレント映画に留まり続けた、注意深く、美学的に完璧主義者としての小津という従来の像を超えた、映画美学と小津の複雑な関係を明らかにできた（「小津安二郎映画における〈演出〉の美学―1930 年代中盤の作品を中心に」）。

（３）戦間期にグローバルな規模で共有されていた映画美学の考察に関しては、とりわけ岩崎昶の映画批評・理論を検証するにあたって、必要不可欠なものであった。これについては、岩崎についても大きく言及した研究発表において、グローバルな文脈における日本の文化的状況という観点から成果を発表できた（“The Issue of Sound Cinema Aesthetics in Early-1930s Japan: Theory and Practice”）。加えて、現在査読中の英語論文は、日本におけるジガ・ヴェルトフ受容についても大きく言及したものとなっている。さらには、ジークフリード・クラカウアー、ヴァルター・ベンヤミン、テオドール・アドルノをはじめとするワイマール・ドイツにおける映画論（映画論にとどまらない近代論・技術論・思想）の再読を進めた成果として、フランクフルト学派の映画論に関する二次研究の大著（Miriam Bratu Hansen, *Cinema and Experience*, University of California Press, 2012）の読解を深め、現在、共訳者との連携のもと、同著の日本語訳を進めている最中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①　<u>滝浪佑紀</u>「不連続性の感覚―小津安二郎の〈視線の一致しない切り返し〉の発生過程」『東京大学大学院情報学環紀要　情報学研究』85 号、1-20 頁。

〔学会発表〕（計　２件）

①　<u>滝浪佑紀</u>「小津安二郎映画における〈演

出〉の美学―1930 年代中盤の作品を中心に」表象文化論学会、新潟大学（新潟県新潟市）、2015 年 11 月

② Yuki Takinami, “The Issue of Sound Cinema Aesthetics in Early-1930s Japan: Theory and Practice,” Society for Cinema and Media Studies Conference, Seattle, March 2014.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
滝浪　佑紀（Yuki Takinami）
東京大学大学院情報学環・特任准教授
研究者番号：３０６３１９５７

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：